

所蔵作品展

2026年度I「目は口ほどに」

2026年4月11日[土]ー7月5日[日]

※会期中展示替えを行います(前期:4月11日[土]ー5月24日[日]、後期:5月26日[火]ー7月5日[日])。

展示室1 目は口ほどに

「目は口ほどに物を言う」ということわざがあるように、私たちは他者の眼差しから言葉と同じくらい、あるいはそれ以上に多くの感情や意図を読み取ろうとします。

当館のコレクションは「人間像」を収集方針の一つとしており、人物の目が印象的に表された作品を数多く所蔵しています。本展では、「目」の表現に注目し、作品における「目」が鑑賞者にどのように働きかけているのかを探ります。

また、昨年度新たに収集した谷原菜摘子の〈方舟はもう現れない〉を初公開いたしますので、ぜひご注目ください。



尾形月耕〈花見うらゝか〉明治後期(前期展示)



パブロ・ガルガーリョ〈キキ・ド・モンパルナスのマスク〉1928年

展示室1 現代版画

ハンガはメディアだ

4月11日[土]ー5月10日[日]

ハンガ、色彩の魔術

5月12日[火]ー6月7日[日]

ハンガそれは生の刻印

6月9日[火]ー7月5日[日]

展示室2 子どもたちに伝える、徳島ゆかりの美術

当館の学校連携事業では、特別展で紹介している吹田文明など、徳島ゆかりの作家や作品を積極的に取り上げています。子どもたちとの鑑賞活動で親しまれてきた所蔵作品をご覧ください。

所蔵作品紹介

谷原菜摘子

〈方舟はもう現れない〉

2025年 油彩、アクリル、オイルパステル、グリッター、ラインストーン ベルベット 直径180cm



光を放つかのようにきらきらと輝く水面の美しさに、思わず目を奪われてしまいます。水面には、白いドレスをまとった人形がぶかぶかと漂っています。よく見ると、その中にひとりだけ、生身の女性の姿が紛れ込んでいることに気づくでしょう。こちらを見つめる彼女とふと目が合った瞬間、観る者はこの不思議な世界へと引き込まれてしまいます。

作者の谷原菜摘子(1989-)は埼玉県に生まれ、現在は関西を拠点に活動しています。京都市立芸術大学大学院在学中より、絹谷幸二賞やVOCA奨励賞などを受賞し、早くから注目を集めてきました。近年では国内各地で個展を開催するほか、グループ展にも出品し、精力的に作品を発表しています。黒や赤のベルベットを支持体に、油彩やアクリルに加えて、グリッターやスパンコール、金属粉といった多様な素材を用い、個人的な記憶や体験を起点としながら、民話や伝承、さらには現代社会が抱える問題を重ね合わせた、物語性のある作品を制作しています。

本作には、海に浮かぶリカちゃん人形と、谷原自身の姿が描かれています。リカちゃん人形は、谷原が幼少期に唯一持っていた人形でしたが、いつの間にか失われてし

まったといいます。子どもたちの憧れの存在であり、大切にされながらも、成長とともに忘れ去られ、やがて見えない場所へと追いやられていくリカちゃん人形。谷原はこの経験について、「飽きられやすく、代替可能であり、消費されてしまう若さや女性性といった、人間の冷酷さが象徴されて」*いると感じたと語っています。

人形の顔についた水滴は涙のようにも見え、救いとなる方舟が現れないことへの不安や悲しみを想起させます。しかし一方で、画面全体には過度な悲しさはなく、浮遊感とともに、煌びやかさやどこにも縛られない自由が広がっています。さらに、画面の中の谷原の力強い眼差しからは、仮に方舟が現れたとしても、人形一すなわち消費されてしまう若さや女性性—とともに同じ方向へ進むことが、本当に望ましいのかという問いが読み取れるようにも思われます。

さあ、方舟が来なくなった今、あなたならどこへ向かいますか。漂流のなかで自らの在り方を選び取ろうとする谷原の姿は、観る者にそう問いを投げかけているようです。

(主任学芸員 久米千裕)

*ギャラリーを通して谷原氏から聞き取り 2025年8月5日付メール



吹田文明〈僕のワイン・レッドの手編のセーター〉2008年 当館蔵

特別展

生誕100年 吹田文明の人生でたどる 版画100年のドラマ

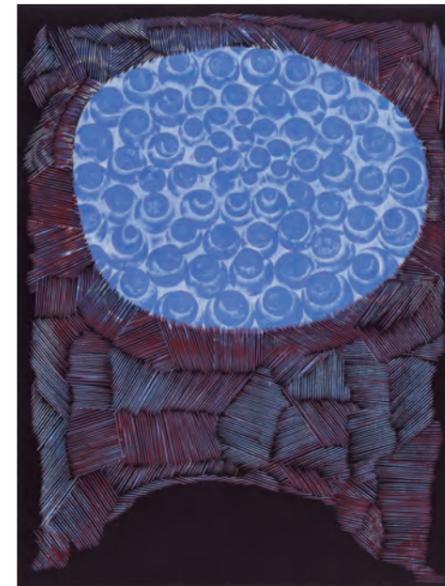
2026年4月25日[土]ー6月28日[日]

はじめに

戦争体験、小学校教員としての出発、国際展での評価、美術大学での教員時代、そして2000年代に至るまで——徳島県阿南市出身の版画家・吹田文明(1926-)の波瀾万丈な人生を、当館所蔵の作品を中心に再構成する展覧会です。

同時代の作家や現代版画の動向を紹介するピック展示も交え、戦後日本版画史のなかで吹田文明が歩んだ道程を改めて見つめ直します。当館では、2006年に開催した特別展「吹田文明展 華麗なる木版画の世界」の個展以来、20年ぶりとなる大規模な展覧会となります。

本展が、作家の歩んだ道を未来へとつなぐ新たな一歩となれば幸いです。以下では、展覧会の構成に沿って、主な見どころとなる作品をご紹介します。



吹田文明〈地球体〉1958年 当館蔵



徳島県立
近代美術館ニュース



The Tokushima
Modern Art Museum



137 April
2026



プロローグ 版に刻まれた戦争の記憶

展示室の冒頭では、作家の人生を語るうえで欠かすことのできない、戦争体験を下敷きにした作品をご紹介します。

1926年11月28日、吹田文明は徳島県富岡町（現阿南市富岡町）に生まれました。19歳で徳島連隊第150部隊に入隊。鳴門で軽機関銃の射手として訓練を受けましたが、軍隊生活はわずか10日ほどで終戦を迎えました。

この体験は、戦後50年を経て制作された〈鎮魂〉シリーズへと結実します。プロローグでは、その代表作〈南に散りし友に捧ぐII（戦後50年の鎮魂詩）〉を展示します。このシリーズについて作家は、先に逝った友人への鎮魂歌で、画面を飛ぶ蝶は、人間のはかない靈魂のようなものとして描いたと振り返っています¹。戦争の惨禍を直接描くのではなく、どこか内省的な深みをもち、見る者を導いてくれる作品です。

第1章 図工室で生まれた新しい表現

第1章では、小学校教員として活動していた時期に制作された作品をご紹介します。

1947年、21歳の吹田は海部郡日和佐町



吹田文明〈南に散りし友に捧ぐII（戦後50年の鎮魂詩）〉1995年 当館蔵

（現美波町）の日和佐小学校に着任し、小学校教員としてのキャリアをスタートさせました。その後、徳島県の長期研究生として派遣された東京美術学校（現東京藝術大学）で学び、都内の小学校で図工専科の教員として勤務しました。その過程で版画と出会い、他の若い図工専科教員たちとともに、版画教育の可能性を模索し始めます。

一方で、作家としての活動も広がります。1950年代の作品には、工業都市を思わせる構造物や、人間を象徴する「目玉」を思わせるモチーフが見られます。それらは、高度経済成長期へと突き進む当時の人々の姿を映し出すものと言えるでしょう。〈眼球体〉は、こうした時代精神を象徴する一作です。

第2章 図工室から世界へ 国際舞台での活躍

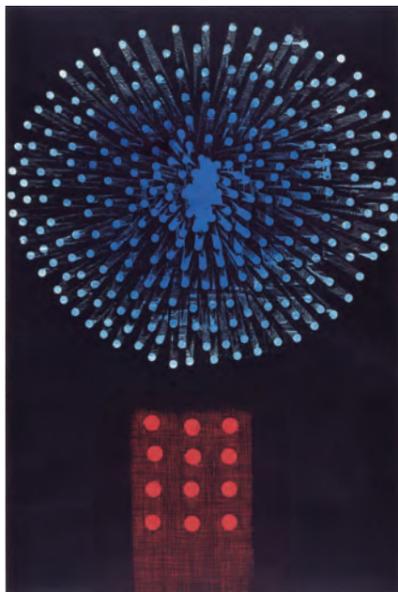
1967年、41歳の吹田はサンパウロ・ビエンナーレに〈ボン〉など光点の作品8点を出品し、版画部門最優秀賞を受賞しました。この受賞をきっかけに、一躍脚光を浴びる存在となりました。

本章では、サンパウロ・ビエンナーレでの受賞作品を中心にをご紹介します。深い闇の中に、ドリルで版材を貫いて生まれた光点が散りばめられ、光点の集中と拡散が星の軌跡や花火の煌めきを思わせます。海外メディアは、こうした作品を生み出した彼のことを「花火の男」と呼んだといっています。

第3章 新しい表現を求めて

1969年、43歳の吹田は多摩美術大学に教授として招聘されました。新しい環境の中で、さまざまな世代の作家たちと切磋琢磨しながら、表現はさらに豊かに広がっていきます。1970年代後半には、木片の表情を直に取り入れた〈木環〉シリーズを制作し、初期作品の要素を新たなかたちで再解釈しました。また、花や蝶などの身近なモチーフが登場したり、水辺や自然を描いた心象的な作品にも取り組んだりするなど、モチーフの幅が広がっていきます。

個人の制作活動以外には、1974年に駒井



吹田文明〈ボン〉1966年 当館蔵

哲郎らとともに大学版画研究会（のちの大学版画学会）を結成し、その発展に長年貢献しました。さらに1992年には、多摩美術大学に日本初となる版画科を正式に創設することにも深く関わりました。

エピローグ 終わらない戦争 そして、身近なものへのまなざし

宇宙や星といった壮大な主題に取り組んできた吹田ですが、特定の事件や身近な物を題材とした、より具象性の強い作品が現れるようになります。2001年に起こったアメリカ同時多発テロ事件を契機に制作されたシリーズもその一例です。さらに、2007年ごろ、80歳を過ぎた吹田は、〈僕のワイン・レッドの手編のセーター〉のように、日常で愛用してきた品々をモチーフにした作品制作に取り組むようになりました。

抽象の作家として知られる吹田ですが、彼はのちに自身の作品について私小説だったと述懐しています²。エピローグでご紹介する作品には、そうした姿勢が、より強く表れているといえるでしょう。

つなぐ版画ひろば

これからの版画100年のために本展では、徳島県内の作家たちが所属する「徳島版画」と連携し、版画のワークショップも開催します。

「徳島版画」は、吹田の教え子や地域の制作者によるグループです。吹田から「徳島版画」へ、さらにその次の世代へと、版画の歴史と豊かな表現が継承され、100年後の未来にも受け継がれていくことを願います。

（主任学芸員 久米千裕）

- 1 「近況 版画家・吹田文明さん」『徳島新聞』2011年7月13日
- 2 「新春座談会―苦闘の時代を越えて―芸術人生を語る」『連盟ニュースNo.420』2007年3月 社団法人日本美術家連盟

作品はすべて ©Fumiaki Fukita 2026/JAA2600033

出品作家:

吹田文明

各章トピック出品予定作家:

饒嘯、池田満寿夫、泉茂、井田照一、瑛九、恩地孝四郎、加納光於、木村光佑、木村秀樹、黒崎彰、駒井哲郎、島州一、菅井汲、中林忠良、永井一正、野田哲也、長谷川潔、浜田知明、福田繁雄、棟方志功、村井正誠、横尾忠則、吉原英雄、李禹煥（50音順）

[生誕100年 吹田文明の人生でたどる

版画100年のドラマ」展に関する催し

学芸員による展示解説

5月6日〔水・振休〕、6月14日〔日〕 いずれも14時―15時

担当:久米千裕（主任学芸員）

展示室3 対象:どなたでも 申込不要 要観覧券

花火玉レプリカ制作体験

6月6日〔土〕 13時30分―16時45分

講師:岸洋介（岸火工品製造所 花火師）、近代美術館スタッフ

アトリエ2、展示室3 対象:小学生以上

定員:10組程度（1組2名まで、先着順、電話・メール申込） 無料

こども鑑賞クラブ+

6月13日〔土〕 14時―14時45分

進行:近代美術館スタッフ

美術館ロビー、展示室3 対象:小学生（保護者同伴可）

定員:30人程度（先着順、電話申込） 無料（保護者は要観覧券）

手話通訳付き展示解説

6月14日〔日〕 10時―11時30分

担当:久米千裕（主任学芸員）

美術館ロビー、展示室3 対象:どなたでも 申込不要 要観覧券

特別夜間開館

6月6日〔土〕、6月13日〔土〕、6月20日〔土〕の3日間

特別に20時30分まで（20時最終入館）夜間開館します。

※所蔵作品展は休室します。

ワークショップ みて体験する版画

■シルクスクリーン

5月16日〔土〕 13時―16時

講師:平瀬恵子（「徳島版画」メンバー）

■水性木版

5月30日〔土〕 13時―16時

講師:近藤幸（「徳島版画」メンバー）

■リトグラフ

6月20日〔土〕 13時―16時

講師:鈴木良治（「徳島版画」メンバー）

■油性木版

6月27日〔土〕 13時―16時

講師:平木美鶴（「徳島版画」メンバー）

アトリエ2 対象:小学生以上

定員:15人程度（先着順、電話・メール申込） 無料



吹田文明〈聖なる日(B)〉
1977年 当館蔵

100th Anniversary of
the Birth of FUMIAKI FUKITA

徳島県立近代美術館ニュース

第137号 2026年3月31日発行(4月号)

発行: 徳島県立近代美術館

770-8070 徳島市八万町向寺山 文化の森総合公園

TEL:088-668-1088 FAX:088-668-7198

イベント申込用メール

ae@bunmori.tokushima.jp

美術館や展覧会についての情報は

当館ホームページをご覧ください。

<https://art.bunmori.tokushima.jp/>

